

美術、芸術の分野においてまでレベルの低いコマーシャルイズムが浸透して、だいたいのことが一目見て「わかって」しまう。もっと言うならば作り手側が見る側に媚びて「わかってもらう」ことを前提にして、弛緩しきった『共感』を刺激するためにモノ作りが行われている。わかってもらうために幅広い裾野の層ないしは、まだ多くを知らない若年層をターゲットに凡庸な月並みなモノを投げつける。次々に SNS で広めてもらえるような刹那的で広く浅くお手軽に共感を得られる内容へとどの分野も加速して陳腐化している。ポピュリズムということなのだろうし、それが所謂ビジネスということになるのだろう。モンキービジネスという言葉は久しく聞かなくなったが、どこを見てもまさにモンキービジネスばかりしか見当たらない。

「わからない」という想像を超えたものに会うことの方が難しく、そのためにクソ溜のようなものをこれでもか！と見させられ続け、そこを掻き分けながらでなければ本当の「わからないもの」に辿り着けないような世の中になっている。まったく疲れ果てるしかない。技術ばかりが進歩していても本当のモノはどんどん隠されて見えなくなっていく。嘆いてもきたがもう沈黙するしかない。

60 近くの年齢までこの分野に携わっていると、そう簡単にわからないというものに出会うことも少なくなってくるわけだし、何かを見てもどこかで見たようなものばかりである。海外作品のネタの出どころも、誰しものが口にする浅はかな「コンセプト」という言い訳も、底の浅い内容もだいたい想像がつく。そんなものを作っているアーティストとして生きていける国なのである。マジで。

そうであっても、未知なるもの、わからないものを眼の前にしたいがために日々の思索や制作があるのではないのか。自分自身の制作も、他者の作品を見る場合にもそのモチベーションは消えないのであるが、。

そんな中で久家さんのこの一連の作品を見る機会を得た。

「裸体」（ということは判別できる）だけが写っている『写真』なのだが、写真と呼んでいいのかも「わからない」。何か言葉にしようとしても「わからない」。当然カメラで撮影したものなので写真なのだと思うのだが、そういうカテゴリーや呼称からも逸脱しているように思われる。非日常的なポーズをした裸体がぼんやりしているだけで何のヒントも与えられていない。被写体だけでなくその全体が極めてシンプルで、図像それ自体が意味も物語も剥ぎ取られた裸体そのもののようであり、またはそれがすべてであるとも言える。

自分自身が今まで経験してきた写真という概念を揺さぶられるような感覚で、対峙しただけで戦う前に参りました、である。それが直感的に感じられた。

「裸体」というテーマはとりわけ画家である私にとって西洋絵画を想起せざるを得ない。古代ギリシャ彫刻、ミケランジェロの未完のねじれた奴隷やシステーナ礼拝堂の壁画、クラナッハの奇妙な人体、エルグレコの歪んだ聖人たち、ルーベンスの肉肉しい裸体、ゴヤ、アングル、ルノワール、ロダン、モディリアアーニ、、、枚挙にいとまがない。これらのヨーロッパ美術を思い出させるのは写真の中で切りとられた非日常的なポーズである。踊っているのか暴れているのか、それを明らかにする必要性もないのだが、その動きのあるポーズが西洋美術の巨匠たちを思い出させたのだが、見ているとじつのところそれとは何か圧倒的に違っている。どちらかと言うならば完全に感情や物語を排した写真という意味で、人物や動物の動作を連続写真で撮影した写真創成期のエドワードマイブリッジの写真を見るときに喚起される感覚に近いかもしれない。または 20 世紀になって以降の抽象化された人物を表現した彫刻作品、ジョエルシャ

ピロの直方体を組み合わせて構成された人体を思わせる抽象彫刻や削ぎ落とされ針金にまで近づいたアルベルトジャコメッティの人物、ブランクーシの極限まで簡素化された頭部や無限柱のような「抽象」と対峙するときに近い。

もちろん現代の技術をも用いることで可能になる表現であるのだと思うのだが、裸体という具体的な対象を撮影しながら、できたイメージは全く具体性を剥ぎとられた異次元に存在する異物か何かのように見える。

ここで言うイメージとはただ単に最終的に出来上がった図像ないしは形象ということであって心象的なものなどではない。きわめて即物的な目に見える図像や色カタチ自体である。

正しい物言いかどうかわからないが、純粋な「イメージ」だけが抽出されている。

世界の一部分を切り取りながらそこに感情や物語が存在しない無機質に近い感覚を捉えている、ということに驚きしかない。そういう時には言葉を失うしかない。

絵であれ写真であれそれがどんな表現であったとしても、人々が言葉を失ってしまう作品に到達することは貴重なことである。

願わくばその試みと稀少な結晶を「わかろう」とせず、ただ目の前にして「見て」もらいたいものである。マジで。

長谷川繁（画家）